

題字は渡辺華山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。

### 厚木にも前方後円墳があった！

厚木市史編集専門委員会委員 望月幹夫

厚木市は神奈川県中央に位置し、東に相模川、西に大山を望み、山地・丘陵・台地・平野とバラエティーに富んだ地形が展開し、旧石器時代から人びとが生活を営んできた地域です。古墳時代の遺跡も数多く存在し、古墳もあちこちで見かけることができます。しかしながら、近年まで、前方後円墳（または前方後方墳）の存在は知られていませんでした。周囲を見渡してみると、相模川流域には、海老名市に秋葉山古墳群、瓢箪塚古墳、寒川町には大神塚古墳、平塚市には真土大塚山古墳（円墳説もある）などが著名な前方後円墳（または前方後方墳）として知られていました。西の金目川流域には、平塚市塚越古墳、秦野市二子塚古墳があります。厚木市から伊勢原市にかけては、後期の円墳や横穴墓はたくさんあるのですが、前方後円墳の空白地帯だったのです。はたして本当に厚木市には前方後円墳が無いのか否か、永年の疑問でした。その疑問が解決されたのは今から43年前の地頭山古墳の発見でした。

### 地頭山古墳

地頭山古墳（図1）は、船子字宮の前の船子洞門交差点のところに位置します。

昭和五十二年（一九七七）、当時、市の文化財保護委員であった飯田孝氏は、船子



図1 地頭山古墳（東から）  
（『厚木市史』古代資料編（2））

取られ、こんもりとした小山がはつきりとみえていたのです。小山に登ってみた同氏は前方後円墳ではないかと直感し、市の教育委員会に連絡しました。そこで市と県の関係者が現地へ赴いて検討した結果、非常に残りの良い、当時としては神奈川県で最大規模の前方後円墳である可能性が高いと判断し、すぐに建設省と保存について協議しました。当初の計画では古墳の前方部にあたる部分が削られてしまうことになっていたので、建設省が計画を変更し、古墳の下にトンネルを通すことで古墳を保存することになったのです。この地頭山古墳の発見が、厚木市で初めての前方後円墳の確認となりましたし、文化財保護の大きな成果となりました。その後、昭和五十二年（一九七八）に古墳の測量調査が行われましたが、保存優先ということで発掘調査は行われていません。

この古墳は恩曾川と玉川に挟まれた長谷

の国道246号のバイパス建設工事現場を通りかかりました。すると、工事のためには雑木林の木々や下草が刈り取られていた。丘陵の先端に位置し、そこから相模川の平野を見渡すことができます。全長約72メートル、後円部径約36メートル、高約7メートル、前方部幅約24メートル、高約4メートルを測り、前方部が北を向いています。埋葬施設は不明ですが、石室ではないと思われ、周溝も無いと思われ、出土遺物は知られていません。五世紀前葉から中葉と考えられています。

地頭山古墳の発見以後、相模川流域における古墳の見直しが進められることになりました。そんななか、第二、第三の前方後円墳が明らかになりました。

### 愛甲大塚古墳（石田車塚古墳）

愛甲大塚古墳（図2）は、玉川と渋田川に挟まれた愛甲台地の北寄りの先端に位置します。小田急線愛甲石田駅の南東250メートルで、厚木市と伊勢原市の境になります。以前は周囲は畑でしたが、現在は民家に囲まれています。長い間、円墳と考えられていました。

大正十三年（一九二四）

ここに訪れた石野瑛氏は、東西120尺（36.4メートル）、南北150尺（45.4メートル）、周囲468尺（141.8

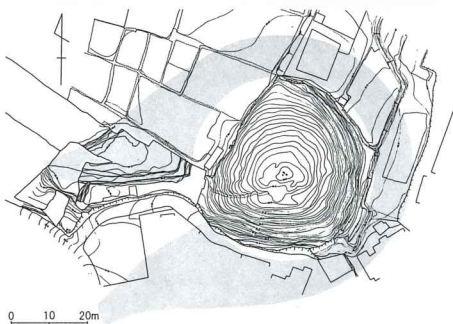


図2 愛甲大塚古墳 復元平面図  
（『厚木市史』古代資料編（2））



メートル」と記し、地元で「車塚」と呼ばれていたことから、前方後円墳であったろうと述べています（石野瑛「中郡成瀬村の古墳と横穴」『武相考古』一九二六）。「車塚」という名前は前方後円墳に付けられることが多いのは確かですが、積極的に前方後円墳と認める人はいませんでした。昭和六十二年（一九八七）、厚木市史編さん室は、市史の資料とするために、この古墳の測量調査を行いました。その後、平成三年（一九九一）と五年に、伊勢原市側で開発に伴う発掘調査が行われ、驚くべきことに、前方部の痕跡と周溝が検出され、愛甲大塚古墳が前方後円墳であることが確認されたのです。石野氏は、名称から前方後円墳と推定しましたが、発掘調査でそれが確認されたわけです。古墳の南側は崖になっており、前方部の大部分と後円部の一部、南側の周溝すべてが失われています。前方部先端は確認できていません。前方部の上面には平安時代の住居址が検出されているので、すでに平安時代には前方部の削平が進んでいたものと考えられます。後円部の墳丘は現状で東西約35メートル、南北約30メートル、高約5メートルを測りますが、調査の結果を総合すると、全長80〜90メートル、後円部径約45メートルと推定されます。後円部の発掘調査が行われておらず、埋葬施設については不明です。遺物としては、墳頂部で柳葉形鉄鏃1個が採集され、周溝からは四世紀後半の土器が出土しています。

### ホウダイヤマ1号墳

ホウダイヤマ1号墳（図3）は、恩曾川と玉川に挟まれた長谷丘陵の中ほどに位置し、同じ丘陵上の南東約1キロメートルに地頭山古墳がありま

す。

平成十一年（一九九九年）厚木市教育委員会 はぼうさいの丘公園建設のために事前の発掘調査を実施しました。そこで、前方後円墳の周溝が発見されたのです。太平洋戦争当時、海軍の軍事施設が設けられていたためか、墳丘は削り取られていました。すべてを調査できたわけではないので、推定ですが、全長約65メートル、後円部径約35メートル、前方部幅約30メートル、くびれ部幅約13メートルになるようです。埋葬施設は見つかっていません。周溝内から出土した土器は四世紀後半と考えられます。

### おわりに

厚木市でも前方後円墳が発見されるようになりました。今後、さらに前方後円墳や前方後方墳が発見される可能性はあると筆者は考えています。

また、相模川流域には四世紀、五世紀代の前方後円墳は見つかるようになりましたが、六世紀代の前方後円墳は知られていません。この謎を解明するのも今後の大きな課題といえます。



図3 ホウダイヤマ1号墳（平成11年）

前方後円墳の被葬者が畿内とどのような関係にあったのかを知ることは、厚木の歴史を考える上でとても重要です。今後、他地域の状況や文献史学の成果などを見据えながら研究を進めていきたいと思います。

## 古代愛甲郡の豪族

厚木市史編集専門委員会委員 永井 肇

### はじめに

古代の厚木市域は、『倭名類聚抄』にみえる相模国八郡のうち愛甲郡に属していましたが、残念ながら郡内に住んでいた豪族は、『類聚国史』の大同二年（八〇七）三月辛卯条の「相模国愛甲郡の人、物部国吉の女、三男を一産す。稲三百束を賜う。」という一例が知られるだけです（『厚木市史』古代資料編(1)文献7）。この国吉は、在地の部民を統率した地方豪族ではないかと思われます。

以下では、物部を中心に、市域周辺地域の史料や考古学の成果を参考に、七世紀から九世紀を主な対象として愛甲郡に住んでいたと思われる豪族について検討します。

### 物部とは何か

そもそも「部民」とは、大化前代に大王や中央豪族などに必要な生産品などの貢納物を提供する集団です。物部は中央の伴造である物部連が、地方豪族を通して支配した集団と理解されます。

中央の物部連が、地方の物部に対して、実際にどの程度の支配力を行使できていたかわかりませ



んが、物部氏が台頭する五世紀後半以降に、王権と連動して、その勢力を地方へと伸張していく過程で、勢力基盤が作られていったと考えられます。

その職掌は、物部の「モノ」を、武器とか精霊・靈魂とみて、軍事や刑罰、また祭祀にあたる集団と解する説がある一方で、律令の規定にみえる職掌に限定すべきでなく、「物」は本来漢語の「ブツ」であつて、その名称は物一般の生産にあつたとみる説や生産技術集団の統率が本来の職掌だつたとする見解もあります。

### なぜ愛甲郡に物部はいたのか？

ところで、物部は全国各地に広く分布しており、それは畿内と七道のすべてにわたりますが、愛甲郡の物部を考えるにあたり、ここでは隣国の武蔵国と甲斐国の例からみていきます。とくに甲斐国の場合、平安時代初期に、相模国と甲斐国で国界争いをしています（『日本後紀』延暦十六年（七九七）三月戊子条）が、その相模側の舞台は当然愛甲郡と高座郡だつたと考えられ、現在の山梨県東部（郡内地域）とは深い関係にありました。

そこで、まず甲斐国の物部について調べると、『正倉院宝物』の太孤児面袋（天平勝宝三年（七五一）頃カ）に用いられた白糸の墨書銘文に、「青猪郷物部高嶋」の名前が見え、現在の甲府市に比定される甲斐国巨麻郡に物部が居住していたことがわかります。また、巨麻郡に隣接する山梨郡には、式内社の物部神社（笛吹市）があり、貞観五年（八六三）六月に、従五位下から従五位上に昇叙したのを皮切りに、短期間に正四位下まで上がっていきます。同じ山梨郡内の美和社（笛吹市）もほぼ同時に昇叙されていることから、当時の富

士山の火山活動が背景にあるかもしれませんが、いずれにしても物部氏と関わる当社が、当時の甲斐国内で重要な意味を持つ神社であつたことが推測されます。

次に武蔵国の物部について整理してみます。『続日本紀』神護景雲二年（七六八）七月壬午条に、入間郡の人として「物部直廣成」がみえるほか、同郡には式内社の物部天神社（埼玉県所沢市）があります。また、『万葉集』には、武蔵国荏原郡主帳物部歳徳、荏原郡上丁物部広足、橘樹郡上丁物部真根の歌がそれぞれ載せられています。

こうした隣国の例から知られるところは、ともに水陸交通の要衝に位置していることです。甲斐の場合、近くには笛吹川などの河川が発達している上、甲府盆地北部を通る東西・南北それぞれの交通路の起点にあたるのが指摘されています。武蔵の場合も、入間郡はのちの東山道武蔵路が通過しましたし、荏原郡・橘樹郡はともに東海道が多摩川を渡河する地点が郡域にあたります。七世紀後半の古代官道の整備は部民の設置より下るため、直接的な関係性は言えませんが、すでに豪族の拠点に何らかの道があつたことが、官道の設定に一定の影響を与えたとも考えられます。

このように理解して他国の物部も調べてみると、多くの場合、沿海部やのちの官道と大河川の結節点などに分布しています。これは物部だけにあてはまるわけではないでしょうが、物部氏が水陸交通を利用しながら進出を続け、それを掌握できる地に部民を配置していったと考えられます。愛甲郡に物部が置かれたことも、相模川に加え、陸路の上でも武蔵、甲斐に通じる要衝に位置して

いたことが関係していたからではないでしょうか。

### 愛甲郡の氏族

次に、愛甲郡に居住した可能性のある氏族を部民とともに推測してみます。

#### ・壬生直氏

壬生直氏は、王子養育の費用を捻出するために推古朝に設置された壬生部を統率した地方豪族です。相模国では相武国造と関係し、愛甲郡と隣接する大住郡と高座郡の郡司層は壬生直氏であつたというのが通説化しています。承和七年（八四〇）には、大住郡の大領壬生直廣主が窮民に代わって私稲を納め、戸口を増益したことで外従五位下を授位されており、高座郡でも翌年に大領壬生直黒成がやはり調庸布などを代納したことで授位されていること（ともに『続日本後紀』）から、愛甲郡の郡司層にも壬生直氏がいたかもしれません。



図4 谷原12号墳（移築復元）  
（相模原市中央区田名塩田所在）



・当麻部

当麻部は、用明天皇の皇子で、厩戸皇子の異母弟にあたる当麻皇子（『日本書紀』推古十一年（六〇三）四月壬申条）の名代の可能性があります。天平十年（七三八）の「駿河国正税帳」に俘囚部領使として「大任団少毅大初位下当麻部国勝」がみえます。また、貞観十八年（八七六）には、甲斐国都留郡の人、当麻部秋継が同郡の庶民である百姓丈部鷹長を闘殺したという史料があります（『日本三代実録』）。事件の背景はわかりませんが、都留郡は前記した愛甲郡との国堺争いの舞台となつたところであり、当麻部が愛甲郡に居住した可能性があります。

ところで、現在厚木市と相模川を挟んだ対岸である相模原市に当麻という場所があります。この地区には、七世紀前半の築造とされる谷原古墳群（図4）と、同時期の集落跡が密集しています。また田名塩田原遺跡の平安時代の竪穴住居跡からは、「一六」の墨書土器が出土しており、愛甲郡六座郷との関連性が想定できます。一方、厚木市側にも六世紀末から七世紀に築造された八基の円墳からなる上依知古墳群（図5）が展開しており、それらの築造時期は、部の設置時期とも対応し、相



図5 上依知古墳群第2号墳石室  
（『厚木市史』古代資料編（1））

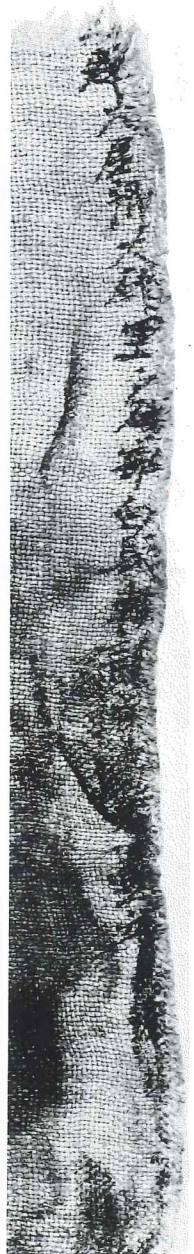


図6 調庸綾純墨書  
〔正倉院宝物〕  
（『正倉院宝物  
銘文集成圖録』）

模川の両岸にまたがる勢力の存在が推測できます。

・丈部

さて、当麻部秋継に殺された丈部ですが、物部同様、この氏族も東国各地で多数認められ、宮廷でさまざまな雑役、あるいは警護にあたつたとされる部民です。相模国では、足上郡の郡司層が丈部造氏だつたとするのが一般的であり（『続日本紀』靈龜元年（七一五）三月丙午条）、愛甲郡に隣接する余綾郡にも存在していること（『駿河国正税帳』など）から、愛甲郡に丈部が居住した可能性も否定できません。

その他、相模国内にとどまらず、東国各地に分布が多数認められる部民に、膳大伴部、丸子部などがあることから、こうした部民および彼らを統率する地方の伴造が存在したことも推測できます。

まとめと今後

本稿は、昨年五月のシンポジウム「愛甲の古代を探る」において報告した内容の一部です。当日は上記の部民に加えて正倉院の調庸綾純墨書（図6）に、「□郡大□郷大磯里戸磯部白髪輪調并庸布耆端」とみえる磯部白髪について、先行研究などを根拠に愛甲郡の人物として報告しましたが、『正倉院寶物銘文集成』の写真版によって再

確認した結果、愛甲郡とは認められないことから書き改めたものです。ただし、上野三碑の一つである金井沢碑（群馬県高崎市山名町）に物部と磯部が同族関係にあったことがうかがえることなどから、愛甲郡に磯部が存在したこと自体は否定できません。

なお、物部については、時代は鎌倉時代に下りますが、飯山（厚木市）に物部を名乗る鑄物師がいたことが知られています。建長七年（一二二五）の鎌倉建長寺の梵鐘に、「大工大和守物部重光」がみえるほか、その後も重光の子孫と思われる物部を名乗る鑄物師は飯山を拠点に活動を続けました。あくまでも推測の域を出ませんが、冒頭であげた『類聚国史』にみえる物部と平安時代末期からみえる鑄物師物部はその系譜上つながっていたと考えることはできないでしょうか。

厚木市史たより 第22号

令和2年3月25日発行  
編集 厚木市教育委員会文化財保護課  
発行 厚木市  
住所 神奈川県厚木市中町三・一七・一七  
電話 〇四六・二二五・二〇六〇  
FAX 〇四六・二二三・〇〇八六

「厚木市史たより」は厚木市ホームページにも掲載しています。